

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」④5

人間に死ぬということ

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第111回と112回がビジョンセンター東京（八重洲南口）で行われ、111回では「横に五悪趣を截り」等について、112回では「銭財を憂う」等について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第109回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

■人間に死んで本願力に甦る

私は本当にびっくりする言葉に出遇ったのですが、それは安田理深先生が亡くなる前に、福井のほうで、門徒で熱心な農家の家とかで講義をしておられたのですけれど、その時に語っておられる言葉の中に、浄土の功德に遇うということは、それは死んでから遇うのではないのだと。凡夫であるところに、浄土の功德に遇えるのだと。だから、親鸞聖人は、『入出二門偈』で、「凡愚遇うて空しく過ぐる者なし」（『真宗聖典』461頁、東本願寺出版）と、凡愚が不虛作住持功德に遇うのだと書いておられる。本願力に遇うことができるということが、人間の最後なのだ。そういう意味を与えられるのだと。浄土に生まれるということは、人間が死ぬことである。浄土に生まれることによって新しい命が与えられる。それはどこで起こるかということ、「信の一念」である。信の一念において、人間に死ぬ。そして阿弥陀の力に甦るのだと。こういうことを安田先生はおっしゃっているのです。それが『無量寿経』が語ろうとする往生なのだ。

往生するということは死ぬことだと、一旦はそう言いながら、死ぬことというのは人間に死ぬことだと。そして本願力に甦る。本願力に遇うということは、人間の終わりなのだ。これが本当にいただけるということが、信心を得ることなのだ。

なるほどなあと。人間に死ぬことなのだ。人間に諦めがつかないで我々はうろろうしている。諦めがつかないものだから本願力に帰することができない。人間の努力で何とかなるのではないかと、いつまでも思い続ける。そうすると、死んでからでしか往けないということになるわけです。死んでからでしか往けないと考えてしまうのは、本願力を信じてない証拠なのだ。自力で往生できることもある。でも自力で往生できるのは、方便化身土である。自力が残っているのは死んだことにならない。だから、身が死んだ時に、初めて方便化身土に往ける。

そういう往生が本願の目的ではない。本願が目的とするのは、凡夫である。凡夫に浄土の功德を与えたい。そういうことが『無量寿経』が語ろうとする「南無阿弥陀仏」なのだ。それに出遇ったのが親鸞聖人である。こういうふうに語ってくださっているのです。すごい講義だと思います。なかなかそこまで読み込むことは容易なことではない。

■南無阿弥陀仏で人間の終わりに出遇う

あたかも金銀財宝があるが如き場所が浄土ですよ。浄土を莊嚴するというのは、そういう形で、この世に似せて語るわけです。しかし、この世の

親鸞仏教センターの動き

(2018年5月～2018年7月) 一抄一

ようにあるわけではない。でも、その限界を凡夫はよくわからない。この世のようにあるのだと思って欲望につかれて往けるかと思う。金銀財宝が山のようにありますよと。ああ、そうか、そういう場所かと、単純にそう思って浄土に往きたいと思っても、浄土に往きたい心が欲ですから、単なる欲では往けないと言われてしまうわけです。本当の純粋な清浄な意欲に触れて初めて往くことができる。凡夫のままでは浄土には触れられない。だから安田先生が言うように、人間の最後だと。人間の最後に触れて、人間に死んで、初めて生まれることができるのが浄土だと。でも、人間に死ぬということは、凡夫に死ぬということなのだ。凡夫の終わりが信の一念だと。だから本願力に触れた途端に人間の意味が変えられる。そういうことに出遇うのが「南無阿弥陀仏」なのだ。南無阿弥陀仏で人間の終わりに出遇う。こういうふうにいただくわけです。だからどれだけ煩惱があろうと、その煩惱をさまたげとしない。その煩惱に死ぬのだと。そういうことが起こるのが南無阿弥陀仏なのだ。

他方仏土の菩薩、他方国土の衆生であっても、我が光があたったならば、どのような衆生であろうとも我が力を与えようと。こういう誓いが四十八願の中に繰り返して出てくるわけです。そういう形で、浄土に生まれたらいただける功德と置いていたら、何のことはない。穢土えどに居ても浄土の功德が来る。浄土の功德に触れる、阿弥陀の大悲の光に触れるのだと。我々がどれだけ暗い心でいようと、心が晴れるのだと。自分は力足りない、体力も足りない、だからだめだというふうに考えて落ち込んでいる人間に、「そうではないのだよ」と。どれだけお前に力が足りなくてもわしが助けてやるのだと。こういう大悲が来る。「南無阿弥陀仏」といただくところに、大きなはたらきを感じられて、このままで人生を尽くしていけるのだと、無駄なものはないのだと、そういう眼が開けるのだと言うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

■2018年

- 5/7 第2回(通算50回)『尊号真像銘文』研究会
5/8 第212回英訳『教行信証』研究会
5/11 ご命日のつどい
5/13 第10回東アジア文化交渉学会(香港城市大学):長谷川研究員発表「井上円了における〈西洋〉および〈東洋〉哲学の受容とその展開」
5/14 第111回(通算第162回)連続講座「親鸞思想の解明」(中央区・ビジョンセンター東京)
5/15 第18回研究交流サロン「『オリエンタリズム』再考」日仏東洋学会代表幹事:彌永信美氏(文京区・親鸞仏教センター)
5/21 第25回「『教行信証』と善導」研究会
5/22 第12回「三宝としてのサンガ論」研究会
5/28 第188回清沢満之研究会
6/1 第19回研究交流サロン「『宗教』概念を考える—近代日本における『宗教』としての仏教の生成—」東北大学大学院国際文化研究科准教授:オリオン・クラウタウ氏、立命館大学非常勤講師:大平浩史氏(文京区・親鸞仏教センター)
6/4 第3回(通算51回)『尊号真像銘文』研究会
6/8 ご命日のつどい
6/12 第14回新潟親鸞学会(新発田市・長徳寺):長谷川研究員発表「井上円了の『仏教』概念の構築—19世紀の思想的状況を背景として—」
6/13 親鸞仏教センター臘扇忌・響音忌法要
6/14 第7回「近現代『教行信証』研究」検証プロジェクト全体会議
6/15 第189回清沢満之研究会「『他力門哲学骸骨試稿』に学ぶ—研究の方向性—」大谷大学短期大学部専任講師:西本祐攝氏(文京区・親鸞仏教センター)
6/18 第112回(通算第163回)連続講座「親鸞思想の解明」(中央区・ビジョンセンター東京)
6/20 第59回現代と親鸞の研究会「親鸞思想に立脚した憲法的刑法学を求めて—本願法学への歩みと現在—」名古屋大学名誉教授・中京大学名誉教授:平川宗信氏(文京区・親鸞仏教センター)
6/25 第13回「三宝としてのサンガ論」研究会
6/26 第213回英訳『教行信証』研究会
6/29 第26回「『教行信証』と善導」研究会
7/1 第25回真宗大谷派教学大会(大谷大学):青柳研究員発表「親鸞と他者—『諸仏』を鍵語として—」、戸次研究員発表「仏道における『事』の探究—中国における戒律受容の側面—」、中村研究員発表「『一向他力』の主張とその波紋—證空・良遍とその系譜に着目して—」
7/17 第214回英訳『教行信証』研究会
7/20 ご命日のつどい
第14回「三宝としてのサンガ論」研究会
7/23 第113回(通算第164回)連続講座「親鸞思想の解明」(中央区・ビジョンセンター東京)
7/24 第4回(通算52回)『尊号真像銘文』研究会
7/27 第190回清沢満之研究会
7/30 第27回「『教行信証』と善導」研究会

掲載論文

- 5月 「近代仏教」第25号
長谷川研究員「真理と機—仏教因果説論争から見る清沢満之の思想と信仰—」
6月 「佛教学研究」第60巻第1号
長谷川研究員「〈書評〉山本伸裕・碧海寿広編『清沢満之と近代日本』」